

日経交遊抄(要旨)2009.6.22 掲載より

意思決定するヒト

・35年ほど前、判断はテキパキとできるが動作が遅い人と、動作は速いが判断がゆっくりの人の違いを計測しようとした。東京理科大学の学生であった私は、溝口文雄先生の指導で統計的決定理論を応用し、判断と動作の能力を分けてみた。

・同大学院では、人がものごとを決めるのということをさらに学びたいと、佐伯胖先生の下で、リスクについて考えた。間違っ大損するのは嫌だが、予想外に大儲けするのは誰も嫌ではない。トヴェルスキーとカーネマンの初期の論文を読みながら、リターンとリスクを平均値と分散で測るのはおかしいと考えた。

・後に行動ファイナンス理論でノーベル賞を受賞したカーネマンの初期の論文を読み、私はそう問いかけた。佐伯先生は静かにこう答えた。「人間は必ずしも合理的でないが、合理的であることを求めている」。

・今でこそ有名な行動ファイナンス理論だが当時はみな手探り。ゼミの仲間が実験し、私は応用のモデルを考え、マーコビッツのポートフォリオを解いてみた。いずれも素朴なものであったが、このころ30歳代だった若き気鋭の研究者に鍛えられたことが人生のコアとなった。

・溝口先生(理大名誉教授、ウィズダムテック CEO)はコンピュータサイエンスで革新的な仕事をされ、佐伯先生(東大名誉教授、青学教授)は教育分野の研究に進み、教育学の大家になられた。

・私は野村グループに入り、経営者が意思決定して、どう企業価値を生んでいくかを分析するアナリストをやってきた。意思決定するヒトへの興味は今も尽きることがない。

鈴木行生